

副詞(的機能を持つ表現)の意味分析

——思わず、無意識に、我知らず、知らず知らず、
いつの間にか、いつしか——

李 澤 熊*

キーワード: 副詞(的機能を持つ表現), 意図, 意識, 相互の意味関係

要 旨

本稿は、副詞(的機能を持つ表現)「思わず、無意識に、我知らず、知らず知らず、いつの間にか、いつしか」の6語の個別の意味と相互の意味関係(類似点・相違点)を明らかにすることを目指したものである。分析の結果を簡単にまとめると以下のようになる。

1. 「『無意識に』行う行為」の場合の「意識」には、様々なレベルがある。
2. 「思わず」は〈ある刺激〉による〈瞬間的・条件反射的行為〉としてとらえられる場合に用いられる。
3. 「知らず知らず」は、話し手がある行為をする(あるいは、話し手のおかれたある状況が変化する場合、〈ある行為(状況)から別の行為(状況)に移る〉までの「プロセス」とでもいうべきものがあると考えられ、ある程度時間がかかると思われる場合に用いられる。
4. 「我知らず」は「思わず」と「知らず知らず」より広い意味領域を持っている。
5. 「いつの間にか」と「いつしか」はそれぞれ「ある事柄の変化の結果」に注目して述べる場合と「ある事柄の変化のはじまり」に注目して述べる場合に用いられる。

1. はじめに

1-1. 研究の対象

本稿は、副詞(的機能を持つ表現)¹「思わず、無意識に、我知らず、知らず知らず、いつの間にか、いつしか」の6語を考察対象とする。これらの6語の意味を分析した先行研究としては、国広他(1982)、藤原他(1985)、森田(1989)、飛田他(1994)、酒井(1998)がある。それぞれの記述には参考にすべき点も多いが、いずれも各語の個別の意味と相互の意味関係(類似点・相違

* LEE, Tackung: 名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士後期課程。

¹ 現在刊行されている辞書を調べてみると、「無意識に」と「いつの間にか」はそれぞれ「無意識」と「いつ」が見出し語として載せられている。つまり、この2語は「副詞的機能を持つ表現」として扱われていると考えられる。なお、本稿における引用例の容認度の判定は、日本語母語話者によるものである。

点)の記述が十分とは言えない。例えば、従来「いつの間にか」と「いつしか」は文体差を除けば、ほとんど同義語であると指摘されてきたが、本稿では相互の相違点の明確な記述を試みる。

1-2. 本研究の意義

筆者は、拙論(2000b)で、上にあげた6語を含む主体の意図に関わる副詞(的機能を持つ表現)15語²の性質について考察した。その結果、考察した語は「情態副詞」と「陳述副詞」の両方の性質を持ちつつ、語によってその一方の性質をより強く持つという連続的な性質を持っていることが明らかになった。また、15語の性質をさらに詳しく検討した結果、5つのグループに分けるのが適当であることを示し、その上で、副詞の中でも位置づけが連続的であるのと同様に、下位分類した各グループ間も連続的につながっていることを指摘した。

そこで、本稿で考察する6語は、「ある行為を気づかないまま行う場合に用いられる」という共通点を持つグループである。また、このグループは「話し手以外の人(事物)の客観的な様子を表すことができるかどうか」によって、さらに「思わず、無意識に、我知らず、知らず知らず」と「いつの間にか、いつしか」に下位分類される。下位分類された2つのグループは「知らず知らず」と「いつの間にか」によって連続的につながっていると考えられる(詳しくは後述)。そういう面で、本稿の考察は各語の個別の意味と相互の意味関係(類似点・相違点)を明らかにすることによって、各グループが連続的につながっていることを確認することにもつながる。

以下、本稿の構成について簡単に述べる。

まず2.では、各語の用法の変異形について考察する。次に3.と4.では、それぞれ「思わず」と「無意識に」、「思わず」と「知らず知らず」と「我知らず」を対比し、各語の意味特徴、及び相互の意味関係について考察する。続いて5.と6.では、それぞれ「無意識に」と「我知らず」、「知らず知らず」と「いつの間にか」を対比し、各語の意味特徴、及び相互の意味関係について考察する。さらに7.では、「いつの間にか」と「いつしか」について考察する。それぞれの組み合わせは相対的に意味が近いと考えられるものである。それぞれの対比から、各語の持つ個別の意味と相互の意味関係が明らかになる。最後の8.は本稿の考察のまとめである。

2. 各語の用法の変異形

(1)「思わず」と似た語に、「思わず知らず」という形があるが、意味的には「思わず」と変わらないと思われる。やや古めかしい表現である。

² うかつにも、うかつに、うかうか(と)、うっかり(と)、つい、思わず、無意識に、知らず知らず、我知らず、いつの間にか、いつしか、ふと(ふっと)、何気なく、さり気なく、それとなく。

- 1 試写室の人たちは、思わず知らず、ぐーっと膝をのりだした。(井上ひさし『ブンとフン』: 125)
- (2) 「知らず知らず」は例2のように、「知らず知らずのうちに」の形で用いられる場合がある³。また、例3のように「知らず知らずの」の形で、名詞を修飾する用法がある。
- 2 たぶん知らず知らずのうちに眠りこんでいたのだ。(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』: 768)
- 3 同時に平凡にもなってきたが、薫さんに対する知らず知らずの好意は少しも変わらなかった。(志賀直哉『小僧の神様・城の崎にて』: 365)
- (3) 「知らず知らず」と「我知らず」はそれぞれ「知らず知らずに」、「我知らずに」の形で用いられる場合がある。意味的に「知らず知らず」、「我知らず」と変わらないと思われる。文章語的な言い方である。
- 4 (前略)いくら一生一度のチャンスとはいえ、隣近所の顔馴染のおばさんに出くわしたりしたら破局的だと思うと知らず知らずに忍び足になる。(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』: 500)
- 5 人間が我知らずにやってしまうことをきちんと書くために、もう一人の主人公が必要だった。(http://www.tku.ac.jp/~96c1210/p8.html)

3. 「思わず」と「無意識に」

本節では、「思わず」と「無意識に」を比較し、それぞれの個別の意味と相互の意味関係を明らかにする。

- 6 逆光の効果を確かめようと、振り向いて、男は思わず目を見張った。沈みかけている太陽を、クレヨン色にぼかし、あたりを乳色にけむらせているのは、ただ飛砂のせいだけではなかったのだ。(安部公房『砂の女』: 331)
- 7 (前略)ふいにマイコの顔があらわれた。あらわれかたがあまりにも急なので、ぼくは瞬間的にたじろいでしまった。そしてマイコの顔を見たとき、ぼくは思わず(無意識に)片手をあげた。(椎名誠『新橋烏森口青春篇』: 227)
- 8 ふーっと眼前が紫いろにぼやけはじめ、自在鉤につるした湯わかしがぐらくらとゆれた。うつ伏せになった。と、口から真紅の血がふき出た。無意識に(思わず)両手で口をおさえたが、指間からこぼれ出る血はとめどもなかった。(水上勉『雁の寺・越前竹人形』: 527)

³ 「知らず知らず」と「知らず知らずのうちに」は何らかの違う性質を持っていると考えられる。相互の意味関係についてはさらに検討が必要である。

拙論(2000a)でも示したように、「思わず」の意味は、〈話し手が〉⁴〈ある刺激が原因となつて〉〈(予想外の)瞬間的・条件反射的行為をする様子を表す〉と記述できる。つまり、上の例6, 7からわかるように「目を見張る」、「片手をあげる」という行為は、「何らかの刺激による瞬間的・条件反射的な反応」としてとらえることができる。例えば、例6の場合「沈みかけている太陽の(不思議な)光景を見て」という〈刺激〉によって、〈瞬間的・条件反射的〉に「目を見張った」ということになる。

一方、上の例7, 8は「思わず」を「無意識に」で、「無意識に」を「思わず」でそれぞれ言い換えることができる。これは、「片手をあげる」、「口をおさえる」を「話し手が気づかないまま行う行為」としてとらえられることができるからである。

酒井(1998)は「無意識に」について、本来意識的にやる動作を自覚しないまま行う場合に用いられると指摘している。

9 ふつう人は座っていても寝ていても、一定の時間がたつと無意識に(*思わず)体を動かし、体の一定部分に長時間圧力がかかるのを防いでいます。

(<http://www.age.ne.jp/x/kenko-jk/body.html>)

10 脳は酸素が不足すると働きが鈍り、眠くなったりボーッとしてきます。こんなときあくびをすることで脳に新鮮な空気を送り込んでいるのだそうです。つまりあくびって無意識に(*思わず)行っている深呼吸なのです。(毎日新聞, 95. 4. 12 朝刊)

11 これは、クレジットカード盗難という旧式の犯罪でなく、インターネット上、あるいは消費者が買い物の後無意識に(*思わず)捨てるカード払いのレシート上から16桁のカード番号を盗み、それを悪用、乱用するというものである。

(<http://www.joea.or.jp/003/02/0110.htm>)

12 課長は顔を近よせて小声でいった。あまりの口臭に俊介は思わず(??無意識に)顔をそむけた。(開高健『パニック・裸の王様』: 50)

酒井(1998)の説明を踏まえると、上の例9~11において、話し手は「動かす」、「行う」、「捨てる」という行為を「気づかないまま行う行為」、つまり「自分の意識下でない行為」としてとらえていると考えられる。「自分の意識下でない行為」ということは、その修飾語がなければ「意識

⁴ 例6は、小説などでよく見られる手法で、話し手が文の中の登場人物(男)の立場に立って(登場人物の視点で)、描写していると考えられる。これについて少し補足すると、金水(1989: 123)は「小説や昔話などの地の文では、誰の心理状態でも自由に描写できるのであるから、始めから人称制限というものがない」と述べている。また、このような小説や昔話の地の文を「語り」と呼んでいる。つまり、この場合も「語り」の文であると考えられる。以下、本稿では、各語の意味あるいは意味特徴を記述するにあたり、話し手と動作などの主体が一致しない時、それが「語り」の文である場合には、「話し手」という用語を用いて記述していく。ただし、「無意識に」は、動作などの主体が特定されない(人間一般を指す)場合に用いられることがある(例9, 10など)。この場合は「話し手」という制限を受けない。

なお、「思わず」は「つい」、「ふと」と類義関係にあると考えられる。これについては、拙論(2000a)を参照されたい。

下にあると考えられる行為」ということである。例えば、例 9, 10 の場合を見ると、普段我々が「体を動かす」、「あくび(深呼吸)をする」という行為をする時、それに気づくのが普通である。だが、この場合の行為は「生理的現象」、「習慣化した行為」と考えられ、話し手によって、それが意識下でないものとしてとらえられていると言える。また、例 11 の場合も、普通「レシートを捨てる」という行為を自分が気づかないまま行うことはできない。ところが、買い物をして、レシートを捨てるのが長年つづき、習慣化することにより、話し手によって、それが意識下でないものとしてとらえられていると考えられる。

以上のことから、「無意識に」は〈話し手が〉〈通常自分の意識下で行う行為を〉〈気づかないまま(行為を)する様子を表す〉場合に用いられると考えられる。

さて、上の例 9~11 は「無意識に」を「思わず」で言い換えることができない。これは「動かす」、「行う」、「捨てる」という行為は話し手によって「単に気づかないまま行う行為」としてとらえられているのであって、「ある刺激による(予想外の)瞬間的、条件反射的行為」とは考えられないからである。

一方、上の例 12 は、「思わず」を「無意識に」に置き換えてみるとやや不自然な文になる。この場合の「顔をそむける」という行為は、刺激を受けて間をおかず、自分も気づかずに行う「条件反射的反応」であると言える。つまり、最初から話し手の行う行為には「意識」が関与していないということになる。従って、「無意識に」を使うと不自然に感じるのである。

酒井(1998)は「無意識に」はその語彙的な意味から「無意志動詞」と共起しないと指摘している。つまり、例 13 の場合、「思わず」を「無意識に」で言い換えられないのは「(涙が)にじむ」が「無意志動詞」であると考えられるからである。

13 彼は下を向いたまま、無言で秋太郎の足もとにクツをそろえた。思わず(*無意識に)まぶたに涙がにじんだ。(山本有三『路傍の石』: 325)

しかし、下の例 14, 15 のように、「(手や足が)動く」、「(技が)出る」という動詞が「無意志動詞」として用いられているにもかかわらず「無意識に」が使われる場合がある。また、例 16 のように、「(喧嘩を)する」は「意志動詞」であるのに「無意識に」が用いられない。このように、「無意識に」は必ずしも「無意志動詞」と共起しないとは限らないし、また、「意志動詞」でも共起の制限があるように思われる。

14 4年のとき父が亡くなり、家業の畳屋に専念したが、レコードやテープ CD を買い集め、いろいろなミュージシャンの演奏は欠かさず聴いていた。彼らの演奏に絶えず刺激され、仕事の最中も無意識に手や足が動き、リズムをとっていた。(毎日新聞, 95. 8. 12 夕刊)

15 開始わずか 27 秒、浜本がやや力上位とみられる田村に鮮やかな内また。無意識に出た技。(毎日新聞, 93. 11. 4 朝刊)

16 *昨日、太郎と無意識に喧嘩をした。

池上(1981)は、日本語は「動作主」的なものをことさら際立たせる傾向の英語などとは対照的であると指摘し、次のように述べている。

(113) a We are going to get married in June.

b 私達、六月ニ結婚スルコトニナリマシタ

〈なる〉は主体の意図的な働きという意味合いを排除する。〈結婚する〉ということをして〈なる〉で覆うことによって、あたかもその出来事が当事者の意図を越えたレベルでおのずから成ったかのような提示の仕方になっており、またそれが好まれるのである。もちろん、「私達、六月ニ結婚シマス」という表現で単に出来事を表わすだけということも可能である。しかし、日本語ではそれでもそれを〈なる〉的な表現にすることによって、もしかして入り込むかも知れない当事者の意図という意味合いを抑えようとする。(池上(1981: 198), 下線は引用者)

本稿で分析対象としている「無意識に」が「無意志動詞」にも用いられるのは池上(1981)の言う〈なる〉的な表現ではないかと考えられる。つまり、例14の「(手や足が)動く」、というのは、実際には「(手や足を)動かす」ことであり、例15の「(技が)出る」というのは実際には「(技を)出す」ことであると思われる。あえて「無意志動詞」を用いるのは、「〈なる〉的な表現にすることによって、あたかもその出来事が話し手の意志を越えたレベルでおのずから成ったかのような提示の仕方になり、話し手の意志という意味合いが抑えられる」からであると考えられる。さらに、例13の「(涙が)にじむ」のような場合、「無意識に」が用いられないのは(通常の場合)自分の意志で「(涙を)にじます」ということが考えられないからである。

一方、「無意識に」は「通常自分の意識下で行う行為」の場合に用いられると説明した。しかし、例16の「喧嘩をする」という行為は、「自分の意識下で行う行為」であるが、「無意識に」は用いられない。これは通常、「人と喧嘩をする」という行為を自分が気づかないまま行うことは考えられないからである。このように「無意識に」は「自分の意識下で行う行為」であっても、話し手自身が気づかないまま行う行為としてとらえることができない場合には「無意識に」は用いられない。

以下の例からわかるように、「無意識に行う行為」の場合の「意識」には様々なレベルがあると考えられる。

17 水質汚染の原因の80%は生活排水なのです。お醤油や、油を無意識に流すことがどれだけ大切な水資源を汚しているのか……

(<http://www.greenplanet.co.jp/eg/am10.html>)

18 私もふとしたことから日本語の美しさに魅せられ目下勉強中の身です。今まで無意識に使っていた言葉がこんなに奥深いものだったのか、と驚きや喜びの連続です。(毎日新聞、93.6.30朝刊)

19 意味があるのかないものか、ふわんと幸せそうな笑みを浮かべたアリスが半分無意識に答

えた。(http://www.diana.dti.ne.jp/~lilac-h/alice-k-9.htm)

例 17, 18 の場合, 「流す」, 「使う」という行為そのものは話し手の意識下にある行為であると考えられる。意識下には「そのような行為をすることがどういう意味を持つか」ということであると考えられる。例えば, 例 17 の場合, 「普段, 生活排水(お醤油や油)を流す時, そのような行為が(自然環境などに)どういう影響を及ぼすか考えていなかった。つまり, 大切な水資源を汚しているとは, まったく気がつかなかった」というようにとらえることができる。また, 例 18 の場合は, 「普段, 言葉(日本語)を使う際に, 一言一言その内容を常に自分の頭の中で考えながら使ったわけではない。あまり大したことでないと思って(深く考えずに)使っていた普段の言葉がこんなに奥深いものだった」というように読みとることができる。一方, 「無意識に」は, 例 19 からわかるように, 「半分」(ほとんど, まったく)を伴って, 自分の行為に対する意識の度合いを表すこともできる。

ここで, 「思わず」と「無意識に」が両方用いられる場合について検討してみよう。

20 タクシーは加藤の下宿の近くで止った。玄関を開けると, 子供を背に負った, 金川しまが立っていた。どこかに, 買物にでも出ていきそうな格好だった。しまは加藤とともに入って来た園子に, 無意識に(思わず)軽く頭をさげた。(新田次郎『孤高の人』: 879)

上の例は「無意識に」を「思わず」で言い換えられるが, 意味は違う。「無意識に」を用いた場合は「頭をさげる」という行為を「しまが単に気づかないまま頭をさげたととらえている」ということである。これに対して, 「思わず」を用いた場合は「しまは, 園子を見て驚き, 瞬時的・条件反射的に頭をさげた」ということになる。

4. 「思わず」と「知らず知らず」と「我知らず」

本節では, 「思わず」と「知らず知らず」と「我知らず」を比較し, それぞれの個別の意味と相互の意味関係を明らかにする。まず, 「知らず知らず」についての例を見てみよう。

21 いつのまにかテレビのドラマは終わって明るくなっていた。綾子は濡れた髪をバスタオルで拭き始めた。丁寧に手を上下に動かす。がなかなか髪は乾かなかった。今の会話を一度どこかで聞いたことがあるような気がした。その動作をしてるうちに, 私は知らず知らず眠り込んでいた。(http://www.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/~kokugo/nonami/siori98/98all.html)

22 面白い小説だと, まるでこちらが登場人物になったような気にさせられる。美しい姫君が物思いに沈んでいる情景など読むと, 知らず知らず, 本当にあることのようにひき入れられてしまったりしてね。(田辺聖子『新源氏物語』: 1485)

以上の例は, いずれも, 話し手に時間の経過を伴った何らかの「変化」が生じていると言える。また, 話し手はその「変化」にまったく気づいていないと言える。例えば, 例 21 の場合「濡れ

た髪をバスタオルで拭く動作をしているうちに、自分も気づかないまま眠り込んでいた」というようにとらえられる。また、例 22 の場合は「小説を読んでいて、とても面白い場面が出てくると、気づかぬうちに、まるで自分が登場人物になったような気になって、だんだんその話の中にひき入れられてしまった」というように読みとることができる。

以上のことから、「知らず知らず」は「髪を拭く」、「小説を読む」といった〈話し手が〉ある行為(あるいは、おかれた状況)から〈気づかないまま〉、「眠り込んでいた」、「まるで自分が登場人物になったような気になって、だんだんその話の中にひき入れられてしまった」といった〈別の行為に移る(あるいは、別の状況におかれる)様子を表す〉場合に用いられると考えられる。

次に「思わず」と「知らず知らず」の意味関係を検討する。下の例 23, 24 は「思わず」を「知らず知らず」で、「知らず知らず」を「思わず」でそれぞれ言い換えることができない。

23 渡辺建造主任は、樫野の設計を軍艦課に、また実際の建造を工作技師川北維一に命じた。初め、川北は、樫野の設計図を目にした時、その異様な形に思わず(*知らず知らず)目を見はった。(吉村昭『戦艦武蔵』: 189)

24 エリアンは知的で聡明な女性です。その若さに似合わないくらい落ち着きがあり、着ている服にしても今回は黒を基調にしたとてもシックな雰囲気でした。(お母様の影響ででしょうか)控えめながらしっかりと自己主張し、押し付けがましさはありません。エリアンに出会った人は知らず知らず(*思わず)彼女の魅力に惹かれて行きます。

(<http://village.infoweb.ne.jp/~fwgc9700/elian.htm>)

これは、先に見たように「思わず」が〈ある刺激〉による〈瞬間的・条件反射的行為〉であるのに対して、「知らず知らず」は、〈ある行為(状況)から別の行為(状況)に移る〉までの「プロセス」とでもいうべきものがあると考えられ、ある程度時間がかかると思われるからである。例えば、例 23 の場合「知らず知らず」が用いられないのは、「設計図の異様な形を目にした時、間をおかず、すぐ目を見はった」というように、この場合の話し手の行為は〈ある刺激〉による〈瞬間的・条件反射的行為〉であって、「設計図を目にする」という行為から、「目を見はる」という行為までの「(時間の経過を伴った)プロセス」といったものが考えられないからである。逆に、例 24 の場合、「思わず」が用いられないのは、「惹かれる」というのは、〈ある刺激〉による〈瞬間的・条件反射的行為〉とは考えられないからである。つまり「エリアンに出会った瞬間、彼女に惹かれる」のではなく、「エリアンに出会い、時間がたつにつれて、性格、服装などから彼女の格好良さがわかるようになり、自分も気づかぬうちに、だんだん彼女の魅力に惹かれていく」ということである。

今度は、「我知らず」を取り上げる。藤原他(1985: 199)は「我知らず」について、「『思わず』とほぼ同義だが、改まった文章語的な言い方」と説明している。しかし、下の例 25, 26 は「我知らず」を「思わず」で言い換えることができない。つまり、文体差以外に何らかの相違点が

あると考えられる。

- 25 そろそろ青春時代も終わりかなと感じ始める。近くで書類などを読むときに我知らず(*思わず)眼鏡を外すようになった。

(<http://www.econ.nagasaki-u.ac.jp/staff/afukaura/keireki.html>)

- 26 退屈な午後の授業。机に突っ伏して、ひたすら授業の終わりを待つ。開け放たれた窓から、仄かに初夏の香のする春風が、オレの髪を撫で、通り過ぎて行く。もう春も終わりなのだろうか。我知らず(*思わず)窓の外を見遣る。

(<http://www.shirakami.or.jp/~yuwkoh/th11.htm>)

例 25, 26 において「眼鏡を外す」、「窓の外を見遣る」という行為は、いずれも「自分の行った行為に気づいていない」ということが言える。例えば、例 25 の場合「書類を読むとき、自分も気づかないまま眼鏡を外す」ということである。また、例 26 の場合も、「『もう春も終わりなのだろうか』と思っているうちに、自分も気づかないまま窓の外を見遣る」というようにとらえることができる。

以上のように、「我知らず」は〈話し手が〉〈自分の行為に気づかないまま〉〈行為をする様子を表す〉場合に用いられると考えられる。

ここで、「思わず」と「知らず知らず」と「我知らず」の 3 語の意味関係について検討する。

- 27 七瀬はわれ知らず(思わず, *知らず知らず)悲鳴まじりに叫んだ。(筒井康隆『エディプスの恋人』: 236)

- 28 その幾行かを辿って見たとき、徹吉は我知らず(知らず知らず, *思わず)そこへ誘いこまれている自分を発見した。(北杜夫『楡家の人びと』: 728)

上の例 27 は「我知らず」を「思わず」で言い換えることができる。また、例 28 は「我知らず」を「知らず知らず」で言い換えることができる。これは「思わず」も「知らず知らず」も、「我知らず」の〈話し手が〉〈自分の行為に気づかないまま〉〈行為をする様子を表す〉という意味をさらに限定した意味であると考えられるからである。つまり、「我知らず」は「思わず」と「知らず知らず」より広い意味領域を持っているということになる。

5. 「無意識に」と「我知らず」

本節では、「無意識に」と「我知らず」の意味関係を検討する。「無意識に」と「我知らず」はともに、自分の行為を「気づかないまま行う」ととらえることができる。そこで、次の例のように「無意識に」を「我知らず」で、「我知らず」を「無意識に」でそれぞれ言い換えることができる場合もある。

- 29 「どうせそうよ。どうせそうなのよ」桃子は無意識に(我知らず)粗い砂をつかみ、目の前

を横切ろうとする小蟹に投げつけた。(北杜夫『検家の人びと』: 370)

- 30 柵の根から、手がのびた。よごれているが、大きな手だった。私はわれ知らず(無意識に)、爪先立ってその手をにぎった。(三浦哲郎『忍ぶ川』: 476)

しかし、「無意識に」と「我知らず」は違う意味の側面も持つ。以下の例は「無意識に」を「我知らず」で、「我知らず」を「無意識に」でそれぞれ言い換えることができない。

- 31 一九八七年春、入社してすぐ赴任した水戸支局は、「茨城県版」に載せる地域ニュースの取材が主な仕事だった。宿直明けに、高校野球の見出しが間違っていて電話のアラシでたたき起こされたり、無意識に(*我知らず)使った表現が元で「身体障害者を差別するの
か」としかれ、しゅんとしたこともあった。(毎日新聞, 91.10.15 朝刊)

- 32 『鈍感』の折り紙つきの少女だが、さすがにここまで言われてその意味に気づかないほどには抜けてはいなかった。青年の言葉の重さと甘さに、我知らず(*無意識に)膝が震える。
(<http://www.md.xaxon.ne.jp/~yuukis/angepre/pross.htm>)

例 31 において、「我知らず」が用いられないのは、上でも説明したように、話し手は「使う」という行為そのものには気づいていると考えられるからである。意識下には「そのような行為をすることがどういう意味を持つか」ということであると考えられる。つまり、「普段、新聞の記事に使う表現が、『身体障害者』にどういう影響を及ぼすかについて考えず、それが差別の意味があるとはまったく知らなかった」というように読みとることができる。このような場合には、「無意識に」を「我知らず」で言い換えることができない。一方、例 32 において「無意識に」が用いられないのは、上でも説明したように、「(膝が)震える」が「無意志動詞」であるからである。

6. 「知らず知らず」と「いつの間にか」

本節では、「知らず知らず」と「いつの間にか」を取り上げる。まず、「いつの間にか」についての例を見てみよう。

- 33 私は床の上に腹這いになり、頬を床につけていた。水がしたたってくる方を仰ぐと、手の届きそうな高さには黒い天井があり、私はいつのまにかテーブルの下にいることを知った。
(三浦哲郎『忍ぶ川』: 568)

- 34 しかし何処まで行っても、その林は尽きず、それにまた雪雲らしいものがその林の上に抜がり出してきたので、私はそれ以上奥へはいることを断念して途中から引返して来た。が、どうも道を間違えたらしく、いつのまにか私は自分自身の足跡をも見失っていた。
(堀辰雄『風立ちぬ・美しい村』: 333)

以上の例からわかるように、話し手は「テーブルの下にいる」、「自分自身の足跡をも見失っていた」という自分のおかれた状況について、「そうなるまでのプロセスを覚えていない」と言え

る。例えば、例 33 の場合「私は気がついたら、テーブルの下にいた。つまり、どうやってテーブルの下に入ってきたか覚えていない」というように読みとることができる。また、例 34 の場合は、「林のきれいな景色に見とれて林の中へは行って行き、雪雲らしいものがその林の上に拡がり出してきたので戻ろうとし、気がついたら道に迷っていた。つまり、どうやって道に迷うに至ったか覚えていない」と言える。

以上のことから、「いつの間にか」は、〈話し手が〉〈自分が気づかぬうちに〉〈ある出来事や状態が変化していたととらえる様子を表す〉場合に用いられると考えられる。

次に、「知らず知らず」と「いつの間にか」の意味関係を検討してみよう。下の例 35, 36 は「知らず知らず」を「いつの間にか」で、「いつの間にか」を「知らず知らず」でそれぞれ言い換えることができない。

35 ぎょっと驚いて今更のように大きく眼を見張った君の前には平地から突然下方に折れ曲った崖の縁が、地球の傷口のように底深い口を開けている。そこに知らず知らず(*いつの間にか)近づいて行きつつあった自分を省みて、君は本能的に身の毛をよだてながら正気になった。(有島武郎『小さき者へ・生れ出づる悩み』: 196)

36 呆然としたまま電車を乗り継ぎ、いつの間にか(*知らず知らず)私は故郷にたどりついていた。(http://www.freepage.total.co.jp/sylvie/Neal-bn.htm)

これは、「知らず知らず」は「話し手が気づかぬうちに、自分の行う行為(ある状況)が、別の行為に移る(別の状況におかれる)」という「変化のプロセス」に注目しているのに対して、「いつの間にか」は「変化のプロセス」ではなく、「気づいたらそうになっていた」という「変化の結果」に注目しているからであると考えられる。つまり、例 35 の場合「いつの間にか」が用いられないのは、話し手は「そこに近づいて行きつつあった」という行った行為の変化の結果に注目しているのではなく、気づかぬまま「そこに近づいて行く」という行為の変化のプロセスに注目して述べていると考えられるからである。一方、例 36 の場合「知らず知らず」が用いられないのは「自分も気づかぬうちにだんだん故郷にたどりついていく」というような変化のプロセスに注目しているのではなく「気づいたら、もう故郷にたどりついていた」というように、変化の結果に注目して述べていると考えられるからである。

また、「いつの間にか」は例 37 のように、話し手のかかわらない客観的な事柄を表す場合にも用いることができる。「知らず知らず」はこのような文には用いられない。

37 さっきまで降っていた雨はいつの間にか(*知らず知らず)やんでいた。

今度は、「知らず知らず」と「いつの間にか」が両方用いられる場合について検討してみよう。

38 面白い小説だと、まるでこちらが登場人物になったような気にさせられる。美しい姫君が物思いに沈んでいる情景など読むと、知らず知らず(いつの間にか)、本当にあることのようにひき入れられてしまったりしてね。(例 22 を再掲)

上の例は「知らず知らず」を「いつの間にか」で言い換えられる。意味的な相違点として、「知らず知らず」を用いた場合は「小説を読んでいて、とても面白い場面が出てくると、気づかないうちに、まるで自分が登場人物になったような気になって、だんだんその話の中に引き入れられてしまう」と読みとることができる。これに対して「いつの間にか」を用いた場合は「小説を読んでいて、気がついたら、自分が登場人物になったような気になって、その話の中に引き入れられてしまっていた」というようにとらえられる。

7. 「いつの間にか」と「いつしか」

本節では、「いつの間にか」と「いつしか」の意味関係について検討する。森田(1989)は「いつしか」は「いつの間にか」の意味を表し、文章語的表現であると説明している。ところが、以下の例は「いつしか」を「いつの間にか」で言い換えてみると、かなり不自然な文になる。つまり、「いつしか」と「いつの間にか」は文体差以外にも何らかの相違点があると思われる。

39 鈍行の夜行列車で一人旅をするのが好きだった私にとって、よく見慣れた懐かしい風景のようだった。“甘たるきニスの臭い”でも加われば、朔太郎の“夜汽車”そのものではないかと思ったりもした。しばらくの間、人々を興味深く眺めていたが、期待と不安の渦巻いていた私にとって、この風景は、あまりにもゆったりとのどかだったせい、いつしか(??いつの間にか)ひどく場違いなものに思えてきた。(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』: 8)

40 夫からの送金が途絶え、夫のいるシンガポール陥落のニュースが伝わる。職のないデージーは頼み込んでバンドでピアノを弾かせてもらう。断られてもしつこく押し掛けるデージーの熱意にトロンボーン奏者のマックス(ルーク・ライリー)は、いつしか(??いつの間にか)好意を抱き、後押しするようになる。(毎日新聞, 91.9.4 夕刊)

以上の例において、「ひどく場違いなものに思えてきた」、「好意を抱き、後押しするようになる」という事柄は、話し手によって「それがいつからそうなったかわからない」というようにとらえられていると言える。また、その事柄は「ある程度時間が経過するとともにそうなった」ということになる。例えば、例39の場合「この風景を眺めているうちに、ひどく場違いなものに思えてきたが、それがいつからそのように思えてきたかわからない」というようにとらえることができる。また、例40の場合は「断られてもしつこく押し掛けてくるデージーに好意を抱き、後押しするようになったが、それがいつからそうなったかわからない」というように読みとることができる。

以上のことから、「いつしか」は〈話し手が〉〈ある出来事や状態の〉、「いつからひどく場違いなものに思えてきたかわからない」、「いつからデージーに好意を抱き後押しするようになったか

わからない」といった〈変化のはじまりに気づいていない様子を表す〉場合に用いられると考えられる。

下の例 41, 42 は「いつの間にか」を「いつしか」で言い換えることができない。飛田他(1994: 55-56) は「いつしか」を「気づかないうちに時間がゆっくりと経過し、その間に状態が変化したという意味であるが、時間の経過そのものに視点がある」と説明している。

41 いつの間にか(*いつしか)幼なじみの友達が結婚していた。

42 いつの間にか(*いつしか)彼女の名字が山田に変わっていた。

飛田他(1994)の説明に従うと、この場合「いつしか」が用いられないのは、例 41, 42 はいずれも、時間の経過そのものに視点があるのではなく、変化の結果に注目して述べていると考えられるからであるということになる。

ところが、例 43, 44 の場合の「いつしか」は飛田他(1994)の意味記述では説明できないと考えられる。

43 明け方の寒気とともに眼を覚ますと風は静かになっていた。外に顔を出してみると、いつしか雪はやんでいた。(新田次郎『孤高の人』: 808)

44 少し平坦になり、杉木立になると大日神社。なかなか荘厳な雰囲気のところ、雨宿りがかねて小休止。スズタケがめだってくるが、昨年開花でもしたものでしょうか、このあたりのスズタケはみんな枯れていた。シカは困っているだろう。いつしか雨が上がり、陽が射してくると、背後に石尾根がのぞいてきた。

(<http://www.kumagaya.or.jp/~yasutani/Yamaniki/okutama/tenso.htm>)

これは、例 43, 44 における「雪がやむ」、「雨が上がる」という事柄は、時間がゆっくり経過してそれとともに変化するのではなく、ある時点における変化であると考えられるからである。従って、この場合も、「いつしか」を〈話し手が〉〈ある出来事や状態の〉〈変化のはじまりに気づいていない様子を表す〉とする意味で説明した方が適切ではないかと考えられる。つまり、それぞれ「眼を覚まして外に顔を出してみると、いつからかわからないが、雪がやんでいた」、「スズタケを眺めながら、少休止しているうちに、いつからかわからないが、雨があがっていた」というようにとらえることができる。

一方、上の例 41, 42 は「いつの間にか」を「いつしか」で言い換えることができないと指摘した。上でも説明したように、「いつしか」は〈話し手が〉〈ある出来事や状態の〉〈変化のはじまりに気づいていない様子を表す〉場合に用いられる。従って、話し手自身は当該の出来事や状態の変化が起こっている状況におかれていなければならないと考えられる。つまり、当該の出来事や状態の変化が起こっている状況におかれているからこそ、変化のはじまりに注目できるのである。ところが、上の例 41, 42 の「結婚する」、「名字が変わる」という事柄は、話し手がある時点において「結婚している、名字が変わっている」という事実をはじめて知ったことを述べている。つ

まり、話し手が当該の出来事や状態の変化が起こっている状況におかれるということが考えられない。例えば、例41の場合、「いつしか」を用いると、「幼なじみの友達と接しているうちに、いつかわからないが結婚していた」というようになってしまう。つまり、接しているのに結婚していることに気づいていないのは普通考えられないということである。

8. ま と め

以下では、本稿で考察した副詞(的機能を持つ表現)「思わず、無意識に、我知らず、知らず知らず、いつの間にか、いつしか」の6語の分析結果を簡単にまとめておく。

まず、各語の個別の意味の分析結果をまとめると次のようになる。

「思わず」: 〈話し手が〉〈ある刺激が原因となって〉〈(予想外の)瞬間的・条件反射的の行為をする様子を表す〉

「無意識に」: 〈話し手が〉〈通常自分の意識下で行う行為を〉〈気づかないまま(行為を)する様子を表す〉

「我知らず」: 〈話し手が〉〈自分の行為に気づかないまま〉〈行為をする様子を表す〉

「知らず知らず」: 〈話し手が〉〈ある行為(あるいは、おかれた状況)から〉〈気づかないまま〉〈別の行為に移る(あるいは、別の状況におかれる)様子を表す〉

「いつの間にか」: 〈話し手が〉〈自分が気づかないうちに〉〈ある出来事や状態が変化していたととらえる様子を表す〉

「いつしか」: 〈話し手が〉〈ある出来事や状態の〉〈変化のはじまりに気づいていない様子を表す〉

次に、各語の相互の意味関係については、以下のとおりである。

まず、「思わず」と「無意識に」は「話し手がある行為を気づかないまま行う」という共通点を持っている。ただし、「思わず」は〈ある刺激〉による〈瞬間的・条件反射的の行為〉としてとらえられる場合に用いられる。一方、「『無意識に』行う行為」の場合の「意識」には様々なレベルがあると考えられ、「話し手の意識下にある行為」にも用いられることがある。この場合、意識下にはないのは「そのような行為をすることがどういう意味を持つか」ということである。

次に、「思わず」は〈ある刺激〉による〈瞬間的・条件反射的の行為〉としてとらえられる場合に用いられるのに対して、「知らず知らず」は話し手がある行為をする(あるいは、話し手のおかれたある状況が変化する)際、〈ある行為(状況)から別の行為(状況)に移る〉までの「プロセス」とでもいうべきものがあると考えられ、ある程度時間がかかると思われる場合に用いられる。

また、「我知らず」は「思わず」と「知らず知らず」より広い意味領域を持っている。

最後に、「知らず知らず」はある事柄を「変化のプロセス」に注目して述べる場合に用いられる。これに対して、「いつの間にか」と「いつしか」はそれぞれ「変化の結果」に注目して述べる

場合と「変化のはじまり」に注目して述べる場合に用いられる。

例文出典

- (1) 検索エンジン goo (<http://www.goo.ne.jp>).
- (2) CD-ROM 版『毎日新聞('91~'96)』.
- (3) CD-ROM 版『新潮文庫の100冊』(1995).

参 考 文 献

- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学——言語と文化のタイポロジーへの試論』, 大修館書店.
- 李 澤 熊(2000a)『「思わず, つい, ふと(ふっと), 何気なく」の意味分析』『韓日語文論集』第4輯, pp. 217-233, 韓日語日文学会(韓国).
- (2000b)「主体の意図に関わる副詞(的機能を持つ表現)について——非意図的であることを表す語を中心に」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第8号, pp. 43-73, 名古屋大学留学生センター.
- 金水 敏(1989)「報告についての覚書」, 仁田義雄, 益岡隆志編『日本語のモダリティ』, pp. 121-129, くろしお出版.
- 国広哲弥, 柴田 武, 長嶋善郎, 山田 進, 浅野百合子(1982)「ウツカリ, ツイ, オモワズ」『ことばの意味3 辞書に書いてないこと』, pp. 195-202, 平凡社.
- 酒井悠美(1998)「無自覚の行為であることをあらわす副詞」『国文学解釈と鑑賞』第63巻第1号, pp. 94-103, 至文堂.
- 飛田良文, 浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』, 東京堂出版.
- 藤原与一, 磯貝英夫, 室山敏昭編(1985)『表現類語辞典』, 東京堂出版.
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』, 角川書店.